

3. プレ企画・シンポジウム

***** 《プレ企画》 *****
パネル・ディスカッション

台湾研究の地域比較—台湾、日本、米国、欧州の経験交流—

Global Comparison of Taiwan Studies:

Experiences from Taiwan, Japan, USA, and Europe

日時 2017年5月26日(金) 17:00-19:30

場所 京都大学稲盛財団記念館大会議室

司会・企画責任 : 松田 康博 (東京大学)

パネリスト : 日本 : 若林 正丈 (早稲田大学)

米国 : 潘 美玲 (交通大学)

欧州 : 蔡 明燁 (The School of Oriental and African Studies, University of London)

台湾 : 蕭 新煌 (中央研究院社会学研究所)

使用言語 : 中国語 (通訳なし)

【趣旨説明】

「わたしたち」は今ここで台湾を研究している。しかし、それは孤立した営みではなく、幾多もの先人の成果を吸収し、同時代を生きる数多の研究者と切磋琢磨することによって成り立っている。

1998年の日本台湾学会 (JATS: The Japan Association for Taiwan Studies) 設立は、日本の台湾研究者たちが、かつて殖民地経営という国策の下で興隆し没落した歴史と、戦後のイデオロギー的・政治的忌避や無関心を止揚して、「学際的な地域研究としての台湾研究を志向する研究者のネットワーク」(「日本台湾学会設立趣意書」)を作り上げた画期であった。熱気溢れる創立大会の様子は、今でも語り草となっている。

ところで、日本台湾学会設立の目的として、「他地域における台湾研究との交流の窓口の一つとしての役割を果たすこと」が挙げられている(同上)。前後して、北米台湾研究学会 (NATSA: North American Taiwan Studies Association) が1994年に設立され、欧州台湾研究学会 (EATS: European Association of Taiwan Studies) が2004年に設立され、2012年には、台湾研究世界大会 (WCTS: World Congress of Taiwan Studies) が第1回大会を挙げるに到った。JATSは「他者の研究」を志向する組織として発足した。一方他の組織は、(欧米の場合は現地研究者との協力の下)台湾出身者を中心に発足したことから、台湾の民主化と自己主張ともなっていて興隆した「自己の研究」を志向する組織である。

これまで、わずかな例外を除き、個人的なつながりで、それぞれの会員がそれぞれの活動に参加してきた。果たして、それぞれの組織は何を求めてどのような活動を行ってきたのであろうか。他者の研究と自己の研究、そして異なる国土での研究活動の展開はどのような違いをもたらすのであろうか。このたび、WCTS 秘書長を務める蕭新煌氏の提案と協力を得て、台湾研究の地域比較を、経験交流の形で行うこととした。一口に比較といっても容易なことではないが、それは「わたしたち」の範囲に止まりがちな台湾研究の視野を、グローバルな規模に広げる可能性を秘めている。今回のパネル・ディスカッションがそのきっかけとなることを期待したい。